

## 日野ひかり幼稚園ファミリー通信

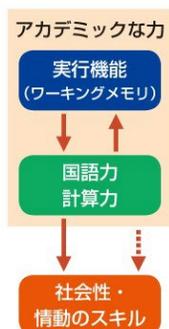
## 「実行機能」と「社会性と情報スキル」と「国語力・計算力」の調査

2019年、ペンシルバニア大のシャロン・ウルフらは、ガーナの子ども3862人について、平均5.2歳ごろをスタートに、2年おきに調査を行い、実行機能と、社会性と情動のスキル、国語力、計算力の関係を調べた結果を報告しました。実行機能とは、「計画を立て順序良く物事をこなしていくことができる力」で、それを発揮するには、ワーキングメモリ（作業記憶）の力、すなわち、記憶や情報を一時的に保持しながらあれこれ操作する力が必要です。

社会性と情動のスキルは、よくIQ（知能指数）と対比されるEQ（情動性知能）的なもので、「社会のルールや、他者や自分の心を理解し、適切に対処していく能力」です。その結果、初期（幼児から小学校低学年）の実行機能は、その後の国語力や計算力を予測したそうです。また、初期の国語力や計算力はその後の実行機能を予測したそうです。つまり、

幼児期の実行機能の力、あるいはワーキングメモリの力が強い  
その後、国語や算数の成績  
がよくなりやすい。

計算ができていく  
その後、ワーキングメモリや  
実行機能の力が伸びやすい



幼児期に読み書きというのです。

シャロン・ウルフの言い方を借りれば、実行機能と学業成績は長年にわたって相補的な関係にあるのです。

さらに、初期の国語力や計算力はその後の社会性と情動スキルを予測するそうですが、初期の社会性と情動スキルはその後の国語力や計算力を予測しないのだそうです。社会性や情動スキルはとても大事です。ひとの気持ちを理解する心は必要ですし、伸びてほしい力です。しかし、トレーニングとしての効率性を考えると（そう考えることが正しいかはいったん置いておくとして）、幼児期では実行機能や学業的な力（シャロン・ウルフは「アカデミックな力」と呼んでいます）を伸ばしておくことがより有効なです。アカデミックな力を伸ばすことで、社会性や情動的なスキルを身につけやすくなるというところが、シャロン・ウルフらの研究の示唆するところですね。

## 子どもの話を聞くコツ

子どもの話を聞いていますか？

親は「聞いていますつもり」でも、子どもは「話を聞いてくれない」と思っているかも!? 今回は「子どもの話を聞くコツ」について考えてみましょう。よく「子どもの気持ちを聴いて共感しよう」といいますが、そのためには、子どもの話をよく聞くことが大事です。アンケートから、子どもたちのこんな声が聞こえてきました。

・お母さんは「早くして」としか言わない。（1年女子）

・お父さんにサッカーの話聞いてもらいたいけど、お父さんは野球の話ばかりする。（2年男子）

・お母さんは、スマホを見ながら聞くので、話をしたくない。（3年女子）

・平日、お父さんと話す時間はあまりない。休日でも、寝ているか、ゴルフに行っているかで話さない。（5年男子）

「宿題、終わった?」「お風呂に入って」など確認や指示が日常会話になっていて、子どもの話をきちんと聞いていなかったな〜と思いついた人もいます。では!?

そんなあなたに朗報です! 実は、魔法の言葉を唱えれば、たちまち「子どもの話を聞く」ことが出来るんです! :

それは、「それから、どうしたの?」という言葉。この一言で、子どもは「もつと話してみよう」と気持ちが一変してきます。すると、会話がスムーズに続いていく〜というわけです。

だまされたと思って、一度、試してみませんか? 最後に子どもの話を聞くための「最強のコツ」を伝授します。それは、子どもが話すのをゆっくり待つことです。

よく、子どもの話が終わらないうちに励ましたり、アドバイスしたりする親がいます。また、「お母さんが子どもの頃は〜」と自分の話にすりかえてしまう場合もあります。

親はよかれと思って言っているのですが、これでは子どもの話を途中で取り上げず（先回りして結論づけた）、自分の話にすりかえず、じっくり話を聞く。それだけでいいんです。

あ、それから、見ていたスマホをそとと横に置くことも忘れずに! :

## 子どものお絵かきをもっと知りたい

お子さんがおうちでお絵かきするのを見て、ふと「こんなとき、どう関わればいいのか?」と思うことはありませんか?

幼児や小学生を対象に絵画教室で指導を行っている、くまがいゆか先生に、お絵かき中によくあるシーンについてうかがいました。

あるシーンを紹介しますが、関わり方はその時々々の環境や、子ども思いや発達によるもので、これだけが正解というわけではなく「もしも今こんな段階なのかも?」「こんなふうにして、ご覧ください。」

1. まねがきを指示・強制されている  
この場合は、ひとまず子どもどうしを離してお絵かきの場をつくるのがよいかもしれません。絵画教室では、こうしたことが起きる原因を確認しつつ、子どもが自発的にお絵かきを楽しめるよう、席替えをする必要があるそうです。

2. 意気投合して、まねがきを楽しんでいる  
これは、あそびとしてお絵かきを楽しんでいるケースです。互いの絵をまねてあそぶのは、同じ振り付けでダンスを楽しむようなもの。まねをするのは適応能力の一つで、まねびでもあります。社会性が発達して自我が育つうちに、だんだんと解消していくので、見守ってOK。

くまがい先生は、現場では「仲よしなんだね」「双子の絵ができるのかな?」と声をかける程度に留めて、様子を見るのが多いそうです。言葉や、画材を握る力や手指のコントロール力など、身体が発達してコミュニケーションが充実すれば、文字や数字、描画への関心も高まり、人に伝わるような絵をかきたいと自分で試行錯誤するようになります。その都度、「できたね」「頑張ったね」とねぎらつてあと押しをしていきましょう。

お子さんのその時の絵を味わいながら、親子でいっしょにお絵かきタイムを楽しんでください!

